

特別  
論考

## 日蓮と政治

江間浩人

はじめに

鎌倉期の日蓮研究には、大別して二つの視点が想定される。一つは、主に教義・教理を中心にした宗教学ないし思想史的な視点、あと一つは門弟を含め、教団の運動や政治動態に焦点を当てた歴史学もしくは政治史的なそれである。

日蓮は、「立正安国論」を上申して時の執権政治を諫め、一方、幕府からは二度の流罪に象徴されるような政治的圧迫を受けているのであり、日蓮研究にとって、幕政との関係の考察は必要である。その意味で、日蓮と門弟の人的ネットワークとその宗教意識から、日蓮と教団を幕政との関連を含めて論じた高木豊氏の『日蓮とその門弟』（弘文堂、一九六五）は貴重である。それ以前の研究史は同書を参照されたい。

その後、近年における日蓮研究の成果として、中尾堯氏の『日蓮』（吉川弘文館、二〇〇二）、佐藤弘夫氏の『日蓮』（ミネルヴァ書房、二〇〇三）、小松邦彰氏らの編著による『シリーズ日蓮』（春秋社、二〇一四・一五）などがあるが、日蓮と教団の政治動態そのものを考察しようとしたものではない。また、政治史の論考で比較的新しいものに本郷和人氏の『新・中世王権論』（新人物往来社、二〇〇四）、細川重男氏の『北条氏と鎌倉幕府』（講談社選書メチエ、二〇一一）などがある。しかし、これも日蓮の動きを追ったものではない。

そこで本論では、政治と教義の二つの視点を踏まえ、日蓮と教団の動向を見てみる。当時の政治状況を勘案しつつ門下の政治的立場、日蓮の教説がもつ政治的な意味を分析し、教団と執権政治の関わりについて考察する。

二つの視点を持つことで、日蓮と幕政との関わりをより重層的に俯瞰し、新たな日蓮像を提示したい。

## 第一章

# 日蓮教団の政治的立場

## 一 日蓮と門下の階層

日蓮は安房国東条郷長狭郡の片海に生まれた。この地の中心は、源頼朝が平家を下した戦勝記念として伊勢神宮に寄進した東条御厨である。日蓮の出自については、日蓮が「旃陀羅の子」と自称していること以外、詳しいことは分からない。しかし、この日蓮の自称をそのままは首肯し難い。そもそも「旃陀羅」などその身を卑下する自称は、「糞囊に金を包む」などの対比と同様の文脈で用いられ、はかない凡身が無上の法華経を持つ悦びを表明する場合に限られているのである。

社会階層が固定された時代において、文字の素養も当

それを示す一例として、まず日蓮の書簡をみたい。日蓮が漢文書簡を送ったと判明する檀那は、池上宗仲、富木常忍、太田乗明、曾谷教信、波木井三郎、大学三郎、妙一尼の七名である。得宗被官であったが東国武家の南条時光や、やはり武家の四条金吾に漢文書簡は送っていない。七名は漢文を読みこなせたのであり、その高い教養からは貴族の血筋が想定されよう。

また、弟子の日興は、日蓮の葬送を書き残している。それによれば葬列の次第は、棺に近い者から、源内三郎、大学三郎、富田四郎太郎、大学亮、南条時光、太田乗明、富木常忍、四条金吾、池上宗仲、四郎次郎、二郎三郎の順になる。筆頭の源内三郎を日興は「御所御中間」と記し、末の二郎三郎を「鎌倉の住人」とすることから、身分によった序列とみている。將軍御所の在勤者が葬列を飾っており、日蓮と將軍家との有縁が推察される。源内三郎自身は、將軍家の使者であろう。

源内三郎に続く大学三郎は、乳母として配流中の源頼朝を支えた比企尼の孫で、その家督を継いだ比企能本である。南条は得宗被官であり、太田乗明は初代問注所執

然、出自と無関係ではなからう。地頭御家人に文盲がいた時代である。土地に付属し、売買の対象ともされた庶民（下人・所従・田夫）に文字の素養はない。高木豊氏は、日蓮は荘官層の出であろうと推測し、日蓮の幼時に乳母が存在したことを指摘されたが、漁事・海事に關心を寄せ、下人や銭貨の使用に慣れ、名馬や名刀を愛でる態様も、領家ないし御家人の被官層にふさわしい。日蓮が書簡で出自に触れないのは、当時の門下にとってそれが自明であったからであろう。

一方、日蓮の弟子も由緒正しい血筋のものたちである。日昭は藤原一族の伊東氏で、工藤祐経の孫であり、日朗も清和源氏の流れを引く平賀氏である。いずれも所伝だが、日昭が材木座の祐経邸跡に実相寺を創建し墓所を留め、日朗が平賀邸跡に本土寺を創建した点は重く見ている。高木氏は、日興が大宅氏の流れにあるとされた。仏法が鎮護国家の責務を担い、その修得が最上の教養であった当時、出家には特段の素養を求められた結果にちがいない。

では、日蓮の檀那はどのような社会階層にあったのか。

事を務めた三善康信の孫である。いずれも仮説の域を出ないものではあるが、そう考えて序列に矛盾はない。また、富木は千葉氏の被官で貴族出身の官僚であり、池上宗仲は、藤原氏の出で作事奉行と伝えられる。名越光時、親時の重臣であった四条頼基の序列は低い。光時は、千葉氏、三浦氏などの名だたる豪族御家人や評定衆を従え、前將軍頼経を担いでクーデターを起こし、北条時頼と執権職を争った人物である。また光時の嫡子・親時は將軍惟康の近臣で、頼基は親時の御所出仕に供奉していた。その頼基が檀那の低位にあった事実は、源内三郎の存在と併せて考えて日蓮門下の社会階層を知る上で示唆に富む。さらに、日蓮が赦免されて佐渡から鎌倉に向かう際、善光寺の僧徒らが日蓮の斬首を謀ったが、日蓮の衛兵が越後守（金沢実時）の衛兵さえも凌駕する規模だったことで、僧徒らは手出しができなかったと日蓮自身が誇つてもいる。

こうした門下の庇護によつて運営される日蓮の教団は、後に身延山に一〇〇人を超える弟子を抱え、五〇〇圓を越す大坊を建設するなど、経済的にも安定していた。

日蓮の遺物も馬六頭、錢二十二貫文、小袖十六着等あり、やはり有力御家人に比せるものだろう。しかも教団は、執権政体と同様、御家人と法曹官僚の二者によって支えられ、その子息を弟子として取り込んでいた。時の政権が、このような教団がある種の政治勢力と認識し、その動向を注視していたであろうことは想像に難くない。

出自についても、日蓮が東条御厨の出身である誇りを再三強調し、頼朝に対する親近感を表白している点は重要である。先に見たように日蓮の門下には、將軍家と近かつた名門の血筋が多い。比企氏、三善氏、伊東（工藤）氏、平賀氏、さらに日蓮自身が千葉氏の九代目当主・宗胤の幼少時に本尊を送っており、千葉氏との並々ならぬ関係も伺えるのである。日蓮の弟子は、その布教を自らの血縁を中心に行なっている。日昭や日朗、日興の教線は、三人の血縁と不可分の関係にある。日蓮の教線も、日蓮自身の血縁から伸びたものとみて間違いなからう。

なつたのは当然である。

一二四六年（寛元四）、泰時の孫である時頼が執権職に就くと、朝時の嫡男である名越光時は「我は義時が孫なり。時頼は義時が彦なり」と述べ、前將軍であつた時頼を担いでクーデターを謀る（宮騒動）。ここで特筆すべきは、光時への同調者が多数にのほつたことである。評定衆から後藤氏、千葉氏、三善氏らが光時方に加わり、さらに相模国最大の豪族であつた三浦氏など多数の有力御家人が時頼から離反する構えをみせた。結局、このクーデターは失敗に終わる。しかし時頼は間髪を入れず三浦氏を滅ぼす（宝治合戦）。得宗家にとつて名越家を中軸とする勢力の脅威が、いかに切迫したものであつたか推察されよう。

さらに一二五六年（康元一）、時頼が執権職を退くと、執権とそれを補佐する連署の職は、名越家を包圍する形で目まぐるしく動き始める。このたらい回しともいえる権力の委譲によって、得宗専制への基盤が整えられていき、一二七二年（文永九）の二月騒動で名越家を凋落させ、国内における得宗家の脅威は消滅する。日蓮の前期

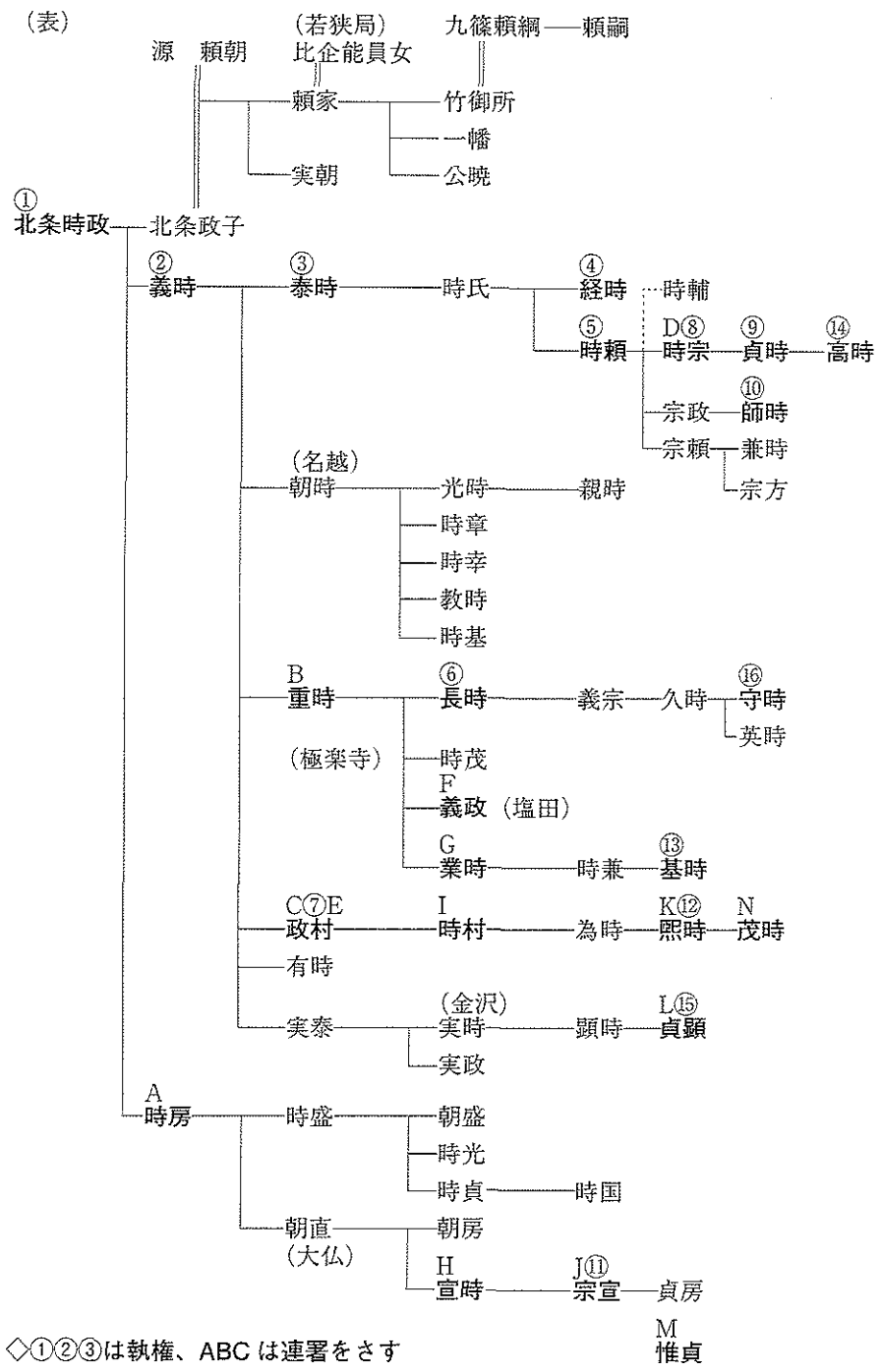
## 二 名越家と教団の立場

北条義時以来、得宗家にとつて主に三つの脅威が存在した。一つは頼朝の血をひく將軍家であり、二つには頼朝以来の有力御家人であり、三つには同じ北条一門にありながら常に得宗家に対峙し続ける名越家である。北条得宗家は、日蓮の活動期までに前二者の排除には成功したが、名越家の脅威は残存していた。なぜ同じ北条一門の名越家が得宗家の脅威となつたのか。

名越家の祖は、北条義時の次男・朝時である。ところが朝時は、兄の泰時が執権職を継いだことに当初から不満をもっていた。朝時には泰時を見下す「我こそ嫡流なり」との強い意識があり、その原因を泰時の出自に求める説も提示されている。朝時の生母は名門比企家の姫ノ舞である。一方、泰時の生母は不明で、父・義時は泰時よりも次男の朝時を厚遇していた。泰時にとつて血筋こそが執権継承の拠り所である。にもかかわらず、それに対して公然と嫡流意識を表明する名越家の存在が脅威との熾烈な抗争の渦中であつたのである。

一方、日蓮の初期の門下に目を転じると、先にも指摘した通り、名越家と同じく將軍家に重用されながらその後、得宗家に謀殺ないし疎まれた御家人の血を引くと推定されるものが存在する。そしてこれらの血縁を軸に教団の教勢は拡大した。教説の問題以前に、教団の構成は反得宗の色彩が濃いものだったのである。日蓮はすでに一二五三年（建長五）の安房における東条景信による弾圧の背後に、極楽寺重時の存在を挙げている。執権に次ぐ連署の立場にいた重時が、鎌倉からほど遠く、しかも無勢に近い教直後の日蓮を、なぜ弾圧する必要があつたのか。これも名越家との関係に注意を払う必要がある。

重時は朝時のすぐ下の弟であつたが、常に得宗家から重用され続けた。執権泰時が朝時を抑えるために重時との連合を図つたからである。長男と三男が手を組んで次男を封じ込める。以後、重時を祖とする極楽寺家は、名越家に対する抑えとして得宗家との二人三脚によつて榮



華を極めていく。ところで、仮に日蓮が名越家と近い存在であったとすれば、日蓮の教線の拡大が重時の目には名越勢力の伸張と映じたはずである。重時が、その動向を早い時期から警戒するのも当然であろう。川添昭二氏が指摘する通り、安房での対決の延長線上に、鎌倉での日蓮弾圧がある。

ここではさらに踏み込んで、日蓮と名越家との接点を考察したい。佐藤弘夫氏は、日蓮が幼少期に両親とともに御恩を被った「領家の尼」は、東条御厨の領家であろうとされるが首肯できる。そしてその領家とは、名越家ではなかったか。

日蓮の檀那であったことで知られ、名越朝時の妻との伝承もある「名越の尼」は、一二七一年(文永八)の弾圧と続く二月騒動の時期に日蓮の元を去っており、それ以前からの門下であった。一二五三年(建長五)、地頭の東条景信による領地強奪に対抗して日蓮は「領家の尼」に加担して訴訟指揮を執る。この景信の領地強奪は、光時の配流によって名越家の力が衰えた時期と重なっている。重時が圧迫を加えるには好機だったといえよう。

訴訟は、問注所の裁断を仰ぐものだったが、異例の速さで領家勝訴に決したことを、日蓮は法華経信仰の験と誇る。後に四条頼基が讒言によって弾圧を被った際、日蓮は訴状を下書きし、それを富木常忍や比企能本らに清書させて提訴の準備をしている。領家訴訟も、同様の人的ネットワークの活用があったと思われる。当時、日蓮はまだ鎌倉に出る前だったが、千葉氏の被官だった富木問注所との往還も指摘される太田など、下総にはそれにならぬ人材が揃い、千葉氏の協力も得られたのではなからうか。

すでに中尾弐氏が指摘しているが、千葉氏十代当主の胤貞は、亡父の九代当主宗胤とともに名越氏の遺骨を保持しており、千葉氏と名越氏の深い接点がある。さらに宗胤は幼少時、父・八代当主頼胤の一周忌に当たり日蓮から曼荼羅を送られ、一方、胤貞は子息を日蓮の弟子としていたことから、千葉氏は、頼胤(一二三九—七五)の時代から続く日蓮との強い結びつきが想定される。実際、日蓮が立正安国論を与えた八木胤家は、頼胤の幼少時にその後見として重要な役割を果たしたといえる。

領家方の勝訴後、鎌倉名越邸の至近の要所に草庵が用意され、日蓮に拠点を提供している。これも千葉氏、名越氏、日蓮の重縁によるものと考えられる。

### 三 二月騒動と日蓮弾圧

一二六八年（文永五）、蒙古からの国書によって勘文の予言が的中すると日蓮の教団は急速に拡大し、国内に一割を超える勢力を形成したと日蓮はいう。後年、日蓮は当時を回顧し、政権はこの時点で日蓮を国師として処遇すべきだった、と述べる。具体的には①日本第一の褒章②朝廷による大師号の下賜③軍議への招聘④異国調伏の祈禱の要請、との四点を挙げる。実はこれが、日蓮が政権に待望する処遇だったという点は重要である。日蓮の唱える立正安国の理想は、すでに日蓮自身の処遇に対する政治目標を含んでいたのである。

一方、日蓮から一段と激しい批判を受けた高僧らは、日蓮教団が悪口・放火・武器の集結などを行なっていると訴える。当時、鎌倉には悪党と称される集団が横行を頼綱である。この企ては、執権時宗が下した「立て文」によって、かるうじて回避された。時宗の処断について日蓮は、時宗の正室が臨月を迎え、僧侶への無法な処刑を嫌ったからであるとの伝聞を記している。しかしこの話は、時宗自身の意志というよりは、むしろ何者かが時宗を説得する口上にふさわしいように思われる。とかく過剰な処断に走る頼綱を、寄合衆の安達泰盛が抑止するという、その後も繰り返された当時の幕政中枢の振幅の一環と捉えたほうが自然ではなからうか。いずれにしても、後家尼と頼綱の連携が日蓮弾圧の重要な要素になっていた点を指摘しておきたい。

さらに、日蓮斬首の企てと二月騒動もまったく無関係ではなかったと思われる。一二七二年（文永九）二月に、執権、連署に継ぐ第三の要職にあった名越時章、その弟の教時が謀反の疑いで殺されて名越家は力を失うの

働き治安を乱しており、幕府は蒙古への防衛からも治安には神経を使い、悪党の追放を命じていた。高僧らは、日蓮教団をその一群に加え、処断を求めたようである。さらに重時の娘であり、時頼の妻であり、現執権・時宗の母である後家尼御前に取り入り、時頼と重時は地獄に堕ちたと日蓮が喧伝している、との作り話を聞かせ、日蓮に対する敵愾心を高揚させた。後家尼に縁ある人々は後々まで「亡き時頼、重時殿のかたき」と日蓮を恨み、一二七九年（弘安二）の富士における熱原法難にも後家尼の介在が疑われる。

一二七一年（文永八）九月の竜ノ口処刑と、続く佐渡流罪についても日蓮は、「御尋ねあるまでもなし。但須臾に頸をめせ。弟子等をば又或は頸を切り、或は遠國につかはし、或は籠に入れよと、尼ごぜんたちいからせ給ひしかば、そのまま行はれけり」と述べ、後家尼らの意を受けた問答無用の処断だったという。

御成敗式目によれば、日蓮の斬首が可能なのは、「殺害刃傷」があった場合である。悪口咎の罪状では、流刑が最も重い処分であった。日蓮は、無法な斬首の企てだが、攻撃の首謀者は頼綱であり、これは日蓮配流の四カ月後に起こっている。この事件で日蓮門下にも藤河入道など死傷者が出たようである。京都と鎌倉で死亡した人々の名前を知らせるよう門下に求めており、日蓮自身も後に「もし流罪されずに鎌倉にいたならば、私は二月騒動で間違いなく打ち殺されていたであろう」と述懐している。また、名越氏の殺害についても、「日本国のかためたるべき大将ども由なく打ちころされぬ」「文永九年二月の十一日に、さかんなりし花の大風におるるがごとく、清絹の大火にやかるるがごとくなりし」と述べ、その無念を表明する。先に触れた「名越の尼」はこの時期に日蓮のもとを一旦は去ったものの、後に後悔し、孫嫁の新尼（誅殺された時章の子・公時の妻）とともに日蓮に本尊を請うたようである。

こうした一連の経過は、日蓮と名越家の結びつきの深さを示しており、それが日蓮に対する処遇にも直結していたといえよう。

#### 四 安達泰盛と平頼綱の抗争

日蓮の後期(一二七二—七八二)は、時宗の治世にあたっており、この時期、幕府内では安達泰盛と平頼綱との抗争が進行していた。泰盛は、御家人の棟梁であり執権外戚として東国武家の利益を代表する存在であった。一方の頼綱は被官の立場にありながら、御内人と呼ばれる得宗家との私的な関係の強さに乗じて幕政に深く関与してきていた。

特に名越家の凋落を決定づけた二月騒動は、御内人(得宗被官)の頂点である頼綱の指揮によって準備された名越家への攻撃であったが、結局、無実の時章を誤殺したとして射手だった御内人を処刑し、事態の収拾が図られていた。これは、御内人主導で起こされた事件に対して外様(御家人)の代表である泰盛らが異議を唱え、逆に御内人を処分した逆転劇であった。事件は、頼綱と泰盛との本格的な闘争の幕開けと位置づけられよう。後期における日蓮と教団に対する処遇の変化は、頼綱と泰

退けている。配流中も、常に両者の息詰まる攻防の渦中に日蓮の身があつたことが伺える。

さらに一二七四年(文永一一)二月一四日の配流赦免も、前年に連署と武蔵守とに任官して日蓮を預かつた塩田義政が、実は泰盛派だったという本郷和人氏の指摘に従えば、ここにも泰盛の影響をみることができる。日蓮が先の偽御教書の不法を時宗に訴え出て、赦免に繋がるのだが、直訴のタイミングは能本と泰盛が計つたに違いない。ちょうど赦免直前の一二日に鎌倉で合戦があり、名越親時も攻められた。親時はこれを無事に乗り越えて戦いは収束している。赦免の手配はこの合戦を契機に整えられたのだろう。日蓮は後に能本へ並々ならぬ感謝を伝えている。日蓮の待遇の改善は、いずれも頼綱派の伸張を泰盛派が押さえ、泰盛派が優位に立った時に行なわれたものと考えられる。

また、佐渡に配流中、門下が鎌倉で赦免を求めて動くとするのを、日蓮は強く制止する。そしてこれを守らない者は、日蓮の弟子ではないとまで厳命した。これも門下の動きが政治的に利用されることを警戒したからに

盛の抗争と深く関連していたと考えられる。

ここで日蓮の大檀那である比企能本の存在に注目したい。能本と泰盛はもともと縁戚関係にあり、清田義英氏が指摘されたように、能本は泰盛の書の師匠でもあったようだ。この能本—泰盛の関係が、これ以降、日蓮と教団の立場を決定づけていく。頼綱による日蓮斬首の企ても、能本の尽力によって泰盛が日蓮に味方した結果、時宗が処刑の回避に動いたものであろう。また二月騒動においても、泰盛の逆転劇と符節を合わせて日蓮の弟子が入牢を解かれ、日蓮自身も塚原から一谷入道のもとに移されて待遇が改善されている。佐渡配流中、日蓮を預かつた大仏宣時は、三度にわたつて偽の御教書を発行して日蓮を圧迫したが、細川重男氏の指摘によれば宣時は頼綱派である。竜ノ口で夜間の日蓮斬首に失敗すると、宣時は預かり役でありながら早朝に鎌倉を離れ、熱海の湯に向かう。泰盛派の巻き返しを予測した意図的なサボタージュであろう。また、佐渡で念仏者が日蓮斬殺を謀つた際、佐渡守護代だった本間重連が、「殺してはいけない」との上からの副状がある」ことを明かし、謀議を

違ひなく、日蓮が鎌倉の政治動向、特に頼綱と泰盛の抗争を強く意識していた証左である。蒙古の攻めは天の治罰であると政権を責め立てて門下の宗教的情念を駆り立てつつも、実際の運動をいさめる日蓮の指示には、現実政治を見極める冷徹な眼があつたといえよう。

身延入山後、日蓮個人に対する弾圧は終息する。一方、建治年間には頼綱派の伸張と符節を合わせ、門弟に圧迫が加えられた。特に連署義政の遁世と処分があつた一二二七年(建治三)六月、四条頼基は讒言をもとに「法華棄経」の起請文を書くよう迫られ、十月に頼綱が寄合衆に加わると、池上宗仲、宗長の兄弟も同様の圧迫を受けて、宗仲は父から勘当される。弾圧の狙いが日蓮本人から、門弟と日蓮の離間に移つたようすがうかがえる。ところが、これらの弾圧も、ほぼ時を同じく「上の御一言」で終息しており、これも泰盛派の動きと無関係ではあるまい。

一方、佐渡流罪によって衰えた教勢は、蒙古襲来を受けて息を吹き返し、教線も拡大していた。日蓮はこの時期、頼綱を筆頭とする御内人を「獅子身中の虫」と言

## 日蓮仏法の政治性

## 一 題目と念仏

い、「守殿の御恩にてすぐる人々が、守殿の御威をかりて人々を脅し、悩まし、わずらわし候」と痛烈に批判する。これに反駁する頼綱や忍性などが、攻撃の機会をうかがっていたことは想像に難くない。背後には後家尼が、得宗家を象徴する存在として控えていたであろう。

後期の日蓮教団は、後家尼（得宗家）―頼綱（御内人）―忍性（諸僧）という御内人に連なる勢力と対峙し、泰盛と頼綱のしのぎを削る対立抗争の内に揺れていたの

第一章では日蓮教団の政治的立場を見てきた。次に日蓮が唱える教説が、当時の政治権力にどのように映ったかを考察したい。

鎌倉時代初頭、仏教界は他宗を否定する専修念仏を邪教であると断じ、さらに幕府に念仏禁制を徹底するよう直訴していた。しかし念仏の流布は衰えず、幕府の禁制を凌駕して広まっていく。一二五九年（正元一）、日蓮は「念仏者追放宣状事」を著し、過去からの幕府の通達を守り、念仏者を追放しよう主張している。この時点で日蓮が確認しているのは、念仏者の宗教的、政治的不法性と日蓮の正当性である。ところが「立正安国論」の提出後まもなく、日蓮の名越の草庵が襲撃される。この

経緯について日蓮は、良忠（然阿）が律宗極楽寺の忍性に讒言したことによると認識している。安房、下総での対立の延長といえよう。

念仏信仰の魅力は、端的にその平易さにある。日蓮が安国論で指摘するように、当時は相次ぐ天変・疫病・飢饉・戦乱によって社会は荒廃し、末法の到来を肌で感じる時代相であった。にもかかわらず鎮護国家を旨とする既存の仏教界は、仏の救済を願う個人の要求に応じられず、唯一、念仏信仰だけが時代の要請に答えていた。経巻の入手に膨大な費用を必要とし、しかも御家人でさえ漢文の素養に恵まれなかった時代である。仏典を読める者も、ごく一部の貴族出身に限られていた。このように財力と教養に富む貴族・武家にしか許されなかった法華経の読誦や書写などと違い、念仏は万人に開かれた宗教性を有していたのである。

一方、鎌倉初期には篤く受容されていた法華経信仰は、宗教的素養に未熟な武家の台頭と符節を合わせた念仏の普及によって急速に衰退していく。日蓮が法華経信仰を再興しようとした時、南無妙法蓮華経の唱題という形態

をとつたのは偶然ではない。法然の念仏流布から遅れること八十年、後発の日蓮は南無阿弥陀仏の易行に対して南無妙法蓮華経という法華経の題目を唱える易行をもつて、法華経信仰の再興を図ったのである。

念仏は法然以前から行なわれていた修行だが、日蓮もこれに対し、すでに平安時代に一部で行なわれていた南無妙法蓮華経の唱題を、法華経修行の易行として理論化する。妙法蓮華経の題目五文字に法華経のすべてが集約されていると論考した天台の「法華玄義」を根拠に、題目の信受は法華経全体の信受と等価であると主張した。

南無の二字は、神仏に対する帰命、信服を表す言葉で、信仰の対象に南無を冠して帰命を誓う形式は一般化しており、阿弥陀信仰も法華経信仰もこの点に変わりはない。日蓮は、帰命の対象を阿弥陀仏とした南無「阿弥陀仏」に代え、南無「妙法蓮華経」と法華経を帰命の対象として題目を唱えたのである。唱題の提唱は、それ自身が念仏に対する折伏であり、法華経信仰も万人に開かれた宗教性を有することになった。日蓮は「権経の題目流布せば実経の題目また流布すべし」として、こうした信仰形

式の変化を、仏法が人々の願望に応えてより広く一般化するための知恵であると歓迎している。

## 二 寺社利権と弾圧の動機

ここで、忍性など高僧らが日蓮を排撃した理由を考察しておきたい。

そもそも日蓮排撃の理由が教義上の問題なら、なぜ日蓮が切望して止まなかった幕府による公場の法論が実現しなかったのだろう。日蓮の教義の排他性や選択の論理が問題だとしても、畢竟これも論争の枠を出ない。実は彼らには教義問題以上に切実な日蓮排撃の動機が存在した。政治的、経済的権益の問題である。

社寺は多くの寺領を領有しその経営にあたる領主であった。当時の祭礼は武力にも匹敵するもので、社寺は、天災や戦鬪に際して祈禱を行ない、日時や方角の吉凶を占い、法令や天災について進言する勘文を通じて、幕府や有力者を助けると認識(五〇)されていた。御家人は論功によつて所領が安堵されたが、社寺は幕府や有力者の帰依

請け負つて利益を上げていた。また港湾施設である飯島の維持管理、および関料徴収の特権も認められていた。さらに由比ヶ浜と材木座海岸一帯での殺生禁断の勵行、取り締まり権も付与され、ときには港湾に運ばれる木材などを、その品不足に乗じて買い占めて暴利を得たようである。これらの利権は、すべて幕府から極楽寺に与えられていた。忍性は、連署・重時の帰依を得たこと(五一)で、膨大な特権を享受していたという。

このように当時の社寺は、時の政権に強く依存していたがゆえに、政権内の抗争から直接的な影響を受ける存在であった。別の例を挙げる。宮騷動と宝治合戦の際、時頼は、ほとんどの僧らが反時頼方に加担して祈禱・呪詛したこと(五二)から、これらの僧を放逐し、唯一、味方した隆弁を鶴岡八幡宮別当・園城寺別当として重用した。当時の僧がいかに政治抗争のうちに存在し、政治的・経済的影響力の保持と増進をはかっていたかが分かる。

同様に、重時の帰依によつて膨大な特権を受ける忍性を、名越家に近いとされる日蓮が激しく批判し、しかもその批判は極楽寺の利権にも向けられた。得宗家と極楽

によつて、所領の安堵が約束されていたのである。(五二)

日蓮は安国論で、念仏への「施を止めよ」と主張する。そして一二六八年(文永五)、蒙古からの国書が届いて安国論での予言が的中し、さらに一二七一年(文永八)には、忍性による祈雨の祈禱が叶わなかったことから、日蓮の忍性攻撃は激しさを増した。いずれも祭礼に関わる問題であり、忍性の経済基盤に直結する問題であった。日蓮が佐渡に配流中、その布教によつて佐渡の念仏者が相次ぎ日蓮門下となつていく事態に対し、念仏僧たちは「日蓮を殺害しなければ、我らは餓死してしまふ」と(五三)と嘆いている。ここに日蓮を弾圧する動機が端的である。念仏僧たちが恐れたのは「餓死」であり、日蓮門下の拡大は、既存の仏教者がその経済基盤を失うことを意味していたのである。

日蓮が殊に激しく批判した忍性を例示してみよう。当時、鎌倉には天変・飢饉によつて多数の流人・非人が押し寄せた。石井進氏の指摘によれば、極楽寺の別当だった忍性は流人・非人を鎌倉境界で押しとどめ、これを組織し、その労働力を使つて大規模な建設事業を幕府からあつたからである。

## 三 密教破折の曇荼羅

日蓮の教説は、佐渡への流罪以前と流罪後では大きく異なる。日蓮自身も、その点を理解するよう門下に教授している。

立教開宗以来、日蓮の批判は念仏と禪に向けられてきた。日蓮は法華第一を説く最澄の直系を自認しており、その宗派的立場は天台僧である。ところが佐渡以降、日蓮は本格的に密教(真言宗・天台宗)への批判を始める。当時、国事に関わる秘法・祈禱は密教の占有であり、蒙古襲来に備える異国調伏の秘法・祈禱が、朝廷や幕府の命を受けて盛んに行なわれたからである。法華経を第一とする日蓮にとつて、大日経を第一として法華経を下す



密教は邪教であったが、天台宗が密教を重用している以上、天台沙門を名乗る日蓮が密教批判を行なうことは容易ではない<sup>(五五)</sup>。日蓮は真言宗・天台宗との対決を周到に準備していた<sup>(五六)</sup>。

日蓮は佐渡流罪によって、法華経勸持品で予言された法難を、経文通りに受けた仏法史上、唯一の法華経の行者であると自覚する<sup>(五七)</sup>。これは「法華経に帰命した者」「法華経を体現した者」すなわち南無「妙法蓮華経」であるとの自覚を意味する。南無妙法蓮華経と呼称できる存在は、日蓮を除いて他にはいない、という根本師の覚悟である。日蓮はこの覚悟のもとに曼陀羅を図顕する。曼陀羅は、そもそも大日如来を根本とする世界観を图示したもので、密教の修法・秘法・祈禱には欠かせない。日蓮は、曼陀羅中央に本尊（中尊）として描かれた絵像の大日如来を、文字による南無妙法蓮華経に改め、「法華経の行者」を本尊とする世界観を図顕したのである。

法華経で説かれる虚空会に基づく日蓮の曼荼羅には、宝塔を中央に描いた密教の法華曼荼羅の影響が明らかだが、日蓮がそれまでの伝統的な絵図を捨て、本尊を

時は婉曲に、ある時は直接的に表明している。「教主釈尊より大事なる行者<sup>(五八)</sup>」との表現も見られ、まさに根本師の覚悟の表出といつてよい。日蓮の曼荼羅は、大きさと書かれた時期・配される諸尊は一樣ではない。ただし本尊に配された本尊の南無妙法蓮華経だけは不動であり、やがて日蓮は自らの名を本尊の真下に自署し、花押を記す。公然と根本師の覚悟を記したのである。

さらに日蓮は曼荼羅の図顕によって、秘法・祈禱についても密教に対峙した。即身成仏に必要な三密（意密、口密、身密）のうち、法華経には口密と身密が欠けているという密教からの批判に対し、日蓮は、意密を「本尊」に、口密を「唱題」に、そして法華弘通の震源となる「戒壇」での授戒儀式<sup>(五九)</sup>を身密に充てて三密とし、それらを密教の三密を超える「三大秘法」と位置づけた。密教からの批判を逆手にとって取り込み、日蓮は秘法・祈禱を唱題に集約する。密教による複雑な儀軌（儀式の規則）による特別な秘法・祈禱からの転換を図ったのである<sup>(六〇)</sup>。

「南無妙法蓮華経」と文字で示したのは、見る者をしてさまざまに解釈が広がる絵図の持つ抽象性を嫌い、意味内容が明解となる文理のもつ厳密性を必要としたからであろう。徹して文理を重視した日蓮の学究性の反映といえる。

いずれにせよ日蓮の曼陀羅の図顕は、大日経を第一とする密教への折伏そのものであった。かつて日蓮は、称名流布に対峙して唱題流布を進め、信仰の対象を阿弥陀仏から妙法蓮華経へ転換して法華信仰の再興を図った。そして今度は、曼陀羅の本尊を大日如来から南無妙法蓮華経に改め、密教に対峙して新たな法華信仰の確立を図ったといえる。この時点で南無妙法蓮華経の意味も、従来の「法華経に対する帰命の誓願」とともに、「本尊たる法華経の行者の表示」という両義性を有することになったのである。

日蓮の書簡中、法華経の行者への言及は、佐渡以降に集中する。そこでは法華経を経文通りに実践した如説修行の者とはいったい誰を指すか、という点を繰り返し問題にした。そしてそれは日蓮自身のことであると、ある

#### 四 政権の公認と身延入山

日朗と比企能本は、佐渡赦免後の日蓮を迎えようと比企が谷に妙本寺を創建していた。比企が谷は頼朝以来、将軍家ゆかりの地である。得宗家の創建ではなかったにせよ、この由緒ある地に、しかも比企氏の開基によって寺の造営が認められたことは、幕府が日蓮を公認したに等しい。後に日蓮は、安達泰盛の働きかけによって、時期からみて異国調伏と思われる祈禱の申し出を受けている<sup>(六一)</sup>。幕府による調伏祈禱は社寺に対する所領の寄進と不可分の関係にあり、日蓮に対しても当然、所領寄進の申し出があったと考えられる<sup>(六二)</sup>。名越家に近い存在として政治的には野党側に位置した教団が、泰盛の理解を得たことで与党側に軸足を移したといえる。

にもかかわらず日蓮が鎌倉からの辞去を選択したのは、なぜだったのか。鎌倉からの放逐は政治的には死を意味するもので、日蓮も弟子の日興も身延入山を「隠居」と記し、日蓮自身は自覚的に「遁世」としての振る舞いを

貫いた。

二度の流罪によって新たな覚悟を得た日蓮は、すでに過去とは一線を画す宗教上の大転換を遂げており、この時点で日蓮が政権を求めるのは、先に見た日本第一の僧・国師としての処遇以外にありえない。特に、日蓮を国師とした祈禱であろう。しかし幕府は日蓮の諫言を容れず、密教僧による祈禱を命じ続けたが、一方で予言の中による日蓮教団の教勢拡大は、蒙古襲来に備えて挙国一致をはかる政権にとって大きな脅威であり、無視できるものではなかった。そうしたなか、政権が日蓮に祈禱を申し付けて特段の配慮を示したのは、日蓮に政治的讓歩を促し、妥協による政治決着をはかったからにちがいない。政権側にとってこれが最大の讓歩案だったと思われる。

ところが日蓮を密教僧と同列に扱う処遇は、宗教上、日蓮が許容できるものではなかった。この点で、政権との妥協の余地がない中、これ以上鎌倉に留まれば、新たな抗争を生むことは明らかであった。政権の中枢に日蓮を公認し、一定の評価を下す者がいる以上、その関係を

維持しつつ、教説を曲げずに政治的な折り合いをつけるには、鎌倉からの辞去が最良の選択だったといえる。以降、日蓮は幕府への一切の諫暁を止め、再度の蒙古襲来については門弟が話題にすることさえ禁じた。こうして政治との関係を断つて安全を確保した日蓮は、次なる時機の到来を待っていたに違いない。

## 五 熱原法難と「日蓮一門」の強調

身延入山後の一二七九年（弘安二）、熱原地方で農民信徒への弾圧が発生した。日蓮は、門弟の暴走による不測の事態を恐れ、早期の解決を第一として訴訟指揮にあたる一方、門下には団結を説く。「日蓮一門」の強調である。

法華経信仰は、理論的には一人でも可能なはずである。文永年間には弾圧の激しさから、日蓮を離れて法華経を信仰しようとする者が現れた。しかしそうした者に対する日蓮の批判は「念仏者よりも久しく阿鼻地獄に入る」と激烈である。法華経信仰が日蓮の教説の根本なら

ば、日蓮と離れても信仰を貫くとする者を日蓮が非難する理由はない。ところが日蓮は、時になつた修行でなければ法華経を信仰したことにはならないと述べ、現在における法華経の行者は日蓮以外にない主張とする。こ

れは端的に日蓮を根本とせよということであり、日蓮とともに生きる以外に法華経信仰は成立しないことになる。日蓮における「一門」の強調は、単に門下の団結を意図したものではなく、信仰の根幹に関わる問題だった。日蓮を中尊に配した曼荼羅は、まさに「法華弘通の旗印」だったのである。

結局、熱原の農民信徒は斬首されるのだが、その際、日蓮門下に対して頼綱らは、法華経を捨て念仏を唱えろ、と迫った。頼綱の狙いは日蓮教団からの離脱であった。宗教上の改宗ではない。にもかかわらず法華経信仰から念仏信仰への改宗を迫ったのは、農民にとって実践可能な仏道修行が称名か唱題に限られていたからであり、唱題による法華経信仰は、それを初めて知った下層の農民にとって日蓮への信仰に等しいものだったからである。ゆえに頼綱は称名と唱題の二者択一を迫った。唱題が、

日蓮信仰と同化しつつ下層へと受容されていった証左とみてよからう。

さらに日蓮による曼陀羅の授与は、密教僧の占有から祈禱を解放し、一般化したといえる。ただし、日蓮が祈禱について示した見解は極めて少なく、あくまでも法華経の通りに修行することの功德と「法華経の行者」の祈りを強調した。日蓮は、自身を根本とする法華経修行を説き、日蓮に連なる一門の拡大をもって末法の理想を描いている。そこに複雑な儀軌による特別な祈禱の入り込む余地はなく、祈りにも日蓮との同心を説いた。この点、熱原の農民信徒が最後まで題目を唱え、日蓮一門として弾圧に耐えたことは、日蓮が目指す法華信仰が下層の農民にまで到達したことを示す画期といえる。日蓮はこのことをもって「出世の本懐」を遂げたと宣言する。

おわりに

日蓮の思想は、執権政治を諫めた「立正安国論」に代表される。「正（法）を立て國を安んじる」という主著のタイトルからも明らかのように、日蓮の関心は政治に

ある。日蓮は仏典とともに唐代の政治指南書である「貞観政要」を携帯し、為政の考察に余念がなかった。

日蓮は、「善悪に付て国は必ず王に随うものなるべし。世間此くの如し仏法も又然なり。仏陀すでに仏法を王法に付し給う。しかればたとひ聖人・賢人なる智者なれども、王にしたがはざれば仏法流布せず」と述べる。日蓮にとつて、政権の帰服こそが何よりも優先されるものだった。ゆえに日蓮は幕政に直接、働き掛ける存在であつたし、政権側もそれに反応した。

では、日蓮と政権との距離を決定づけた政治的な要因は何であつたのか。前期においては、教団が反得宗の旗頭であつた名越家と近しかったことが指摘できるし、後期においては、御家人の代表である安達泰盛と日蓮の接近が挙げられる。これについては第一章で考察した。さらに佐渡配流を契機とする覚悟で飛躍的な変貌を遂げた日蓮は、自身を根本とする仏教界の再編を目指した。そして、日蓮自身を唯一の「法華経の行者」と規定して中尊に据えた曼荼羅を図現する。後期の日蓮は、それまでの天台僧の立場を捨てて密教との本格的な対決に向かい、

政権に自身への帰服を求めた。第二章では、この教説の展開経過と政治との関係を考察した。

本論によつて、日蓮とその教団がいかに幕政との直接の応答の中で、当時を生きたか、新たな日蓮像を提供できたものと思う。

注

(一) 河合正治氏は、「当時（鎌倉中期、筆者注）、武家社会の中堅である地頭御家人たちはまだ文盲のものもあり、古典的教養を身につけるまでには至っていなかった」と指摘された（『中世武家社会の研究』吉川弘文館、一九七三年、九〇頁）

(二) 高木豊「安房に帰つた日蓮」（『金沢文庫研究』一七六、一九七〇年）

(三) 「玉沢手鑑草稿」（『日蓮宗宗学全書 第十九卷』山喜房仏書林、二六二頁以下）、「御書略註」（『日蓮宗宗学全書 第十八卷』一六五頁以下）

(四) 高木豊「日蓮とその門弟」（弘文堂、一九六五年）一九八頁

(五) 前掲注（四）『日蓮とその門弟』一四三、一四九頁

(六) 日興「日蓮遷化記」（『鎌倉遺文』一四七二二）

(七) 「大豆御書」（『昭和定本 日蓮聖人遺文』立正大学編、以下「定本」一八〇九頁）参照。御所への返書と伝わり「大豆一石かしくまつて拝領し了ヌ」と強い謙譲に始まる。大豆一石という供養も他の門下とは桁違いであり、結語も「恐惶謹言」としている。

(八) 「種種御振舞御書」（定本九七八頁）

(九) 「曾谷殿御返事」定本一六六四頁。宮崎英修氏は、天沼俊一『日本建築史』、田沢担・大岡実『図説日本美術史』から当時の建築物は一間が十尺前後であつたことをもとに、一二七四年（文永一二）に建設された一二の柱をもつ三間四面の身延の草庵が三〇坪、六〇畳の広さがあつたと指摘された（『日蓮とその弟子』平楽寺書店、一九九七年、一二九頁）。これに従えば、一二八一年（弘安四）に完成した十間四面の大坊は二七三坪、五四六畳となる。日蓮はこの大坊の価値を鎌倉であれば一〇〇〇貫となると述べる（『地引御書』定本一八九五）。一貫文は、当時、米約一石であつた。

(一〇) 前掲注（六）『鎌倉遺文』一四七二三

(一一) 「弥源大殿御返事」定本一〇三四、「新尼御前御返事」

定本一〇九二

(一二) 中尾堯「日蓮真蹟文と寺院文書」（吉川弘文館、二〇〇二年）五〇頁

(一三) 高木豊氏は、当時は超絶した親権があつたから、親・家長の信仰がそのまま家族内に受け入れられることは、むしろ当然であり、結縁関係を通じて、その信仰はいっそうひろく伝播したと指摘されている（『前掲注（四）『日蓮とその門弟』二三三頁）

(一四) 川添昭二氏は、宝治合戦以後の政情は時宗の解決すべき課題となつており、二月騒動で決着すると指摘された（『日本歴史学会編集『北条時宗』吉川弘文館、二〇〇一年、一六頁）

(一五) 奥富敬之『鎌倉北条一族』（新人物往来社、一九八三年）一二〇頁、細川重男『鎌倉政権得宗専制論』（吉川弘文館、一九九九年）三二頁

(一六) 川添昭二「日蓮の宗教の成立及び性格」（『史淵』六六、一九五六年一月）六六頁

(一七) 佐藤弘夫「日蓮」（『ミネルヴァ書房、二〇〇三年）七頁

(一八) 「清澄寺大衆中」（定本一一三五頁）

(一九) 「四條金吾殿御返事」（定本一三六三頁）

(二〇) 中尾堯『日蓮宗の成立と展開』(吉川弘文館、一九七三年) 一一一、一一三頁

(二一) 中尾堯『日蓮』(吉川弘文館、二〇〇一年) 九四頁

(二二) 『善無畏三藏鈔』定本四七六頁、「中興入道御消息」定本一七一五頁

(二三) 『種種御振舞御書』定本九五九頁

(二四) 『種種御振舞御書』定本九六二頁

(二五) 「するがの國は守殿の御領、ことにふじ(富士)などは後家尼ごぜんの内の人々多し。故最明寺殿・極楽寺殿の御かたきといきとをらせ給ふ」(高橋入道殿御返事)定本一〇八九頁

(二六) 『報恩抄』定本一二三八頁

(二七) 『下山御消息』定本一三三二頁

(二八) 『種種御振舞御書』定本九六八頁

(二九) 『種種御振舞御書』定本九七三頁

(三〇) 『四條金吾殿御返事』定本一三六三頁

(三一) 『光日房御書』定本一一五四頁、「兄弟抄」定本九二五頁

(三二) 『新尼御前御返事』定本八六六、八六九頁

(四二) 『真言諸宗違目』定本六三八頁

(四三) 細川重男氏は、父・盛時の逝去を受けて頼綱が文永末年(一二七五年)には得宗家執事にも就任したとされる(『前掲注(一五)』『鎌倉政權得宗專制論』一六三頁)。網野善彦氏は、

一二七六年(建治二)から翌年にかかる幕府要人の相次ぐ遁世は、安達泰盛と平頼綱の危機的な対立を背景にしたものと推測されている(『蒙古襲来』小学館ライブラリー、一九七四年、二五二頁)

(四四) 『窪尼御前御返事』定本一五〇三頁

(四五) 平雅行氏は、諸行往生を認めない法然による専修念仏の狙いは、墮地獄の恐怖を説く顕密寺院による呪縛と奉仕から、民衆を解放することにあつたと述べ、これが平安浄土教と法然の違いであり、諸行往生を説く鎮西派と法然の質的な違いであり、中世における正統と異端宗教との違いであつた、と指摘された(『浄土教研究の課題』『日本中世の社会と仏教』塙書房、一九九二年、五一―五五頁)。そしてこの思想が荘園制的支配秩序の根幹を揺るがすものであつたがゆえに、専修念仏に對し中世國家が、あれほどまでに苛酷な弾圧を加えなければならなかつた必然性があつた、とされた(『専修念仏の歴史的意思』

(三三) 石井進『鎌倉びとの声を聞く』(NHK出版、二〇〇〇年) 一五〇頁

(三四) 清田義英『比企氏の乱』後の比企氏(『金沢文庫研究』

二二七、一九七四年)

(三五) 前掲注(一七)『日蓮』二〇一頁

(三六) 日蓮によれば、宣時は念仏者らの讒言に従つて「上へ申すまでもあるまじ」と「私の下知を下す」といい、「そらみげうそ(虚御教書)」と批判した。細川重男氏は、霜月騒動後の頼綱專制下において得宗家の重要政務の多くが得宗の花押を有さない執事書状によつて行なわれるようになる指摘された(『前掲注(一五)』『鎌倉政權得宗專制論』一六三頁)。日蓮のいう「私の下知」も執事書状と同様のものとみてよいのではないか。

(三七) 前掲注(一五)『鎌倉政權得宗專制論』三六頁

(三八) 『種種御振舞御書』定本九七三、四頁

(三九) 本郷和人『新・中世王權論』(新人物往來社、二〇〇四年) 一八五頁

(四〇) 『頼基陳状』定本一三五八頁

(四一) 『大学三郎殿御書』定本一六一九頁

義(同二五一頁)

(四六) 前掲注(一六)『日蓮の宗教の成立及び性格』、前掲注(二〇)『日蓮宗の成立と展開』九〇頁

(四七) 菊地大樹氏は、源頼朝の法華経信仰を起点とした御家人の法華経受容を指摘された(『中世仏教の原形と展開』吉川弘文館、二〇〇七年、一六一、六六頁)

(四八) 家永三郎『日蓮の宗教の成立に関する思想史的考察』(『家永三郎集第2巻 仏教思想史論』、一九四七年、二五〇、五四頁)。石井教道氏が指摘されたように、『南無釈迦牟尼仏』

と口唱する釈迦念仏大会を始めた貞慶は、念仏停止を朝廷に求めた「興福寺奏状」の起草者であり、釈迦念仏は専修念仏に對抗して唱導されたものと考えられる。また貞慶の「唐招提寺釈迦念仏願文」には、娑婆世界の本師たる釈尊を捨てて、なぜ遠き阿弥陀仏の浄土を求めるか、との浄土宗批判がある(『鎌倉時代に興れる各種念仏義』『仏教大学研究紀要』仏教大学学会編、通号三八号一九六〇年一月)。この論理は後の日蓮の浄土宗批判にも見られ、日蓮による唱題には、先行する貞慶の釈迦念仏の影響も考慮されている。

(四九) 『撰時抄』定本一〇四八頁

(五〇) 高木豊「日蓮」(『日本人の行動と思想4』評論社、一九七三年、六四頁)

(五一) 竹内理三編「土地制度史」(『体系日本史叢書』山川出版、一九七三年、二二一・四五頁)

(五二) 「種種御振舞御書」定本九七七頁

(五三) 石井進「都市鎌倉における『地獄』の風景」(御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、一九八一年、九〇・九四頁)

(五四) 「聖恩問答抄」定本三五三・五四頁

(五五) 日蓮は伝教の弟子の呼称である「根本大師門人日蓮」

(『法華題目鈔』定本三九一頁)や「本朝沙門」(『教機時国鈔』

定本二四一頁、「顯勝法鈔」定本二四七頁)を名乗っており、

一二六九年(文永六)にも「仏法の滅不滅は叡山にあるべし。

叡山の仏法滅せるかのゆえに異國我朝をほろぼさんとす」(『法門可被申様之事』定本四五三頁)と述べている。

(五六) 一二七〇年(文永七)に「建長五年より今年・文永七

年に至るまで十七年が間・是を責めたるに日本國の念仏・大

体留り了ぬ(中略)真言等の諸宗の誤りをだに留ん事、手に

にぎりておほゆる也」(『善無畏三藏鈔』定本四六五頁)と述

擲出等云々、日蓮法華経のゆへに度々ながされずば数々の二

いかんがせん。此の二字は天台傳教いまだよみ給はず。況や余

人をや。末法の始のしるし、恐怖悪世中の金言のあふゆへに、

但日蓮一人これをよめり」(『開目抄』定本五五九、五六〇頁)

とあり、日蓮は二度の流罪を法華経身読の根拠に挙げ、日蓮に

よって初めて法華経が真実であると証明されたことまで述べる。

(五八) ルチア・ドルチェ「法華経と密教」(『シリーズ日蓮

第一巻』春秋社、二〇一四年、二八二・八四頁)

(五九) 「下山御消息」定本一三四三頁

(六〇) 日蓮は施設としての戒壇を含む、授戒儀式全般を「戒

法」と称し、延暦寺のそれと比較対照している(『三大秘法

べ、翌一二七一年(文永八)の佐渡配流直後の「早勝問答」で

は浄土・禪に対しては二章二十四問であるのに対して天台・

真言に三章三十三問を設けている(定本二〇六一・六八頁)。

一二七二年(文永九)二月の「開目抄」では「日蓮は日本國の

諸人にしうし父母なり。一切天台宗の人は彼等が大怨敵なり」

(定本六〇八頁)と天台・真言の超克を宣言。さらに身延入山

後の一二七四年(文永一一)一〇月、蒙古襲来が現実のもの

なるや「仏法の邪見と申すは真言宗と法華宗の違目なり。禪宗

と念仏宗とを責め候しは此事を申し顯さんためなり」(『曾谷入

道殿御書』定本八三八頁)と述べ、翌年三月には曾谷教信と大

田乗明に対して教典や注釈書の収集を切迫した表現で依頼し

(『曾谷入道殿許御書』定本九一〇・一二頁)、また翌一二七六年

(建治二)にも真言に関する論釈を借用したい旨、清澄寺に申

し出ている(『清澄寺大衆中』定本一一三三頁)。「真言師等に

も召し合せ給はずらむ」(『三沢抄』定本一四四七頁)とあるこ

とから、こうした準備は幕府が主宰する天台・真言との法論を

予期して進められたものと考えられる。

(五七) 「法華経の第五の巻勸持品の二十行の偈は、日蓮だにも

此國に生れずは、ほとをど(殆)世尊は大妄語の人」(『數々見

(六二) 浅井円道氏は、真言僧・覚禪(一一四三〜一二二三?)

の『覚禪鈔』において密教の法華法三密修行に触れた箇所

に、法華曼荼羅に向かつて南無妙法蓮華経と唱えた例があるとされ

た上で、さらに「法華觀智儀軌」による法華修法が専門家によ

(六九)「四條金吾殿御返事」定本一三〇三頁、「生死一大事血脈鈔」定本五二三頁

(七〇)「聖人御難事」定本一六七二頁

(七一)「四條金吾殿御返事」定本六六一頁

## 法然思想 Vol.4

発行日❖2016年8月31日 初版第1刷

編著者

草愚舎・佐々木正

発行

草愚舎

東京都文京区本駒込2-19-4-503 〒113-0021

電話・FAX 03-3946-3883

発売

株式会社言視舎

東京都千代田区富士見2-2-2 〒102-0071

電話 03-3234-5997 FAX 03-3234-5957

<http://www/s-pn.jp/>

DTP組版……勝澤節子

印刷・製本

モリモト印刷(株)

©2016, Printed in Japan

ISBN 978-4-86565-084-6 C0314